

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 TRESNO Fiona

論文題目 Assessing Risk and Protective Factors of
Self-Injurious Behavior

(自傷行為のリスク及び保護要因の検討)

論文審査担当者

主査 名古屋大学大学院環境学研究科教授 伊藤 義美

委員 名古屋大学大学院環境学研究科教授 大平 英樹

委員 名古屋大学大学院環境学研究科准教授 鈴木 敦命

委員 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター 准教授 金子 一史

論文審査の結果の要旨

自傷行為は、臨床的にも注目されているが、その実態はあまり明らかにされていない。本論文は、質問紙調査法を用いてインドネシアと日本における自傷行為の一般的なリスク要因と保護要因を特定し、それらの関係を実証的に解明している。

第1章では自傷行為をめぐる先行研究を概観して、保護要因の研究が少ないこと、幼児期の虐待がどのような要因と関連して自傷行為を生じさせるか、などの研究課題を明らかにし、これらの研究課題をもとに本論文の目的と方法を述べている。

第2章の研究1では、インドネシアの大学生307名を用いて、自殺意図のない自傷行為と自殺企図を伴う自傷行為を比較している。両者の間には抑うつ、及び幼児期の虐待（無視）において違いが見出され、特に幼児期の虐待は自傷行為や自殺企図の強いリスク因子とみなされた。

第3章の研究2では、自傷行為の保護要因を検討している。研究2aは、日本の大学生313名を用いて、自傷行為群と非自傷行為群を比較している。両群には否定的なムードの制御期待、抑うつ、及び幼児期の虐待（無視）において違いが見られた。さらに否定的ムードの制御への強い期待が、幼児期の虐待の影響を緩和して自傷行為を減少させることを明らかにしている。研究2bでは、研究1のインドネシアのデータを用いて、研究2aと一貫する結果を再現して見出している。

第4章の研究3は、自傷行為に関連する対人的特徴である社会的サポートを加えて、幼児期の虐待から自傷行為に至る経路を説明する統合モデルを検証している。日本人大学生377名を用いた研究3aでは、幼児期の虐待から社会的サポートの知覚と否定的なムードの制御期待を通して、自傷行為と間接的にリンクしていた。さらに父親と仲間からのサポート知覚は、ムード制御の期待を増大させ、自傷行為のリスクを減らしていた。研究3bでは、インドネシアの大学生328名を用いて統合モデルを検証し、研究3aの結果を支持する知見を得ている。第5章の総合考察では、一連の研究結果を整理して意味づけ、研究の限界と今後の課題を論じている。

こうして本研究を通して、幼児期の虐待が、自傷行為のリスクを増大させる強力な要因であることが示されている。しかし否定的ムードの制御期待と、家族や友人の社会的サポートの期待は、自傷行為の深刻さを緩和する保護要因であるとみなされた。本研究の知見は、自傷行為のリスク及び保護要因と要因間の関係についての理解を増大させ、自傷行為への介入と予防についても示唆をあたえるものである。

本論文で取り上げた自傷行為の他の要因や関係をさらに明らかにすることや、協力者を広げて調査する必要があるが、これらは今後の研究課題だと考えられる。

以上のように、本研究は質問紙調査法によって自傷行為の一般的なリスク及び保護要因を特定し、それらの関係を実証的に明らかにしたという点で心理学の発展に大きく貢献した。よって、本論文の提出者 TRESNO Fiona さんは博士（心理学）の学位を授与される資格があるものと判定した。